



Title	支那に於ける印度音譯字の二三に就て
Author(s)	松本, 文三郎
Citation	懷徳. 1934, 12, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德

第十二號

支那に於ける印度音譯字の二三に就て

松 本 文 三 郎

今日懷德堂の記念祭に何にかお話をせよといふ理事の方から命令でありましたが、私は支那學と少し専門が違ひますので、堅く御辭退致したのでありますが、是非何かやれといふお話でありまして、己むを得ず此處に書き出してありますやうに、支那に於ける印度の音譯字の二三に就て御話を申し上げます。御清聽を汚さうと思ふのであります。

一体何處にあつても國と國との間の交際が始まり、或は一民族と他の民族とが往來をするやうになりますと、その一地方の言葉が自然他の地方に輸入されるものであります、殊に物品の如き、一國には存在するが、他の國には全くないといふやうなものが、あれば必らず其有る處から無い處へ轉じ來

り、而して其時には物品と同時にその名稱までも傳はつて來るものである、本來輸入國には其物品がなかつたのであるから、之を言ひ顯はす言葉もない、で外國の名稱そのまゝを傳へるより外途はないのであります。

日本に於ても始めて支那と交際致しました時には、支那の言葉が澤山日本語の中にはいつて來ました。而して數千年來民間に用ひられますと、終ひにはそれが日本語であるのか、外國の言葉であつたのか殆んど民間では知らない位普及し通俗化して來ます。例へば御存知の通り「馬」であるとか、「茶」であるとか、「梅」であるとか、いふ言葉は皆外國からはいつて來たものでございます、此頃餘り用いませんやうでありますが、私共の子供の時分には「街道」を「往還」といつて居りました。此等は随分六ヶしい語でありますが我國でも普通民間で使つて居つたのであります。それからヨーロッパ諸國と交際するやうになりましたからは、又色々の言葉が澤山はいつて來ました。今日に於ては外國語を使ふ方が却つてハイカラのやうに感じられて居るので、同じ日本語でいひ表はし得る言葉でも、諸種の外國語を使つてゐるやうな時代でありますが、これも久しい中には終ひには日本化し日本語か外國語か判らないやうにもなりましやう。

支那に於ても矢張その通りであります。殊に支那は古來色々の國と交際して居りましたし、又其歴史も長いものでありますから、諸方の國土からして諸種の言葉が澤山はいつて來て居ります。御存知

てありませうが、今より十數年前（一九一九年）ラーハー・Lauterといふ人がシノ、イラニカ Sino-Iranica といふ本を書いて居りますが、これは支那語の中に混入して居る、主としてペルシャ系統の言葉を選び出し、其語源や歴史を説いたので、此書中には植物、果物、さういふ名稱が約六十種以上も出て居りますが、吾々には非常に興味ある書物であります。このイラン系統のものばかりで而もそれは普通民間に使はれてゐる草木とか、果實とか、いふ類のものだけで六十以上もあるのでありますから、其他にもまだ幾らありますか殆んど判らないのであります、之によつても如何に多數の外國語が、支那に輸入せられ支那化してゐるかといふことが判るのであります、殊に佛教が支那に傳はりましてからは、佛教特殊の言葉、涅槃とか、菩提とかの熟語を始めとし印度西域地方の植物や動物、その他色々の物品の名稱が澤山支那にはいつて來たのであります。殊に佛教では五種不翻の言葉といふものがあります、これは必らずしも皆翻譯出來ないものでもありませんが、翻譯し難いもの又は翻譯すれば却つて誤解を招き易いものでありまして、此等は翻譯せず原語の儘、唯音字で之を寫して居たのであります。所謂五種不翻の語とは、一つは秘密の言葉なのであつて、例へば佛經にはガラニとか咒とかいふものがあります。これは翻譯すれば出來ない事もありますが、した所で意味がはつきりせんものである。それで原語のまゝで傳へておく方が寧ろ安全であり又なんとなく有難味があるので、翻譯しなかつたのである。

第二には多義の語で、何處の國でもさうでありますが、一つの字で色々の意味をもつて居る言葉がある、これは支那語に譯すると一つの意味しか現はされない、それでは本當の原語の意味を盡さぬ事になる。例へば摩訶般若の「摩訶」といふ字の如きは「大」といふ義と其外「勝れたる」とか「多い」とかいふ意味がある。それを支那の言葉で單に「大」と譯するだけでは他の意味が隠れて現はれて來ない。さういふ意味の多い字は特に原語をそのまゝ使つてゐる。第三は支那にない處のもの、これは物品の名稱のやうなものであつて、例へば「瑠璃」とか「玻璃」とかいふものは支那にはなかつたものである。それで其名稱も本國のまゝ傳はつてゐる。動植物でも同様である。それから第四には古例に従ふといふものである、昔の翻譯者が翻譯しないで原語のまゝ残した言葉、例へば「菩提」とか「菩薩」とかいふ類である、「菩提」は覺、「菩薩」は「覺したるもの」といふ意味である、今之を覺者と譯すれば、普通先覺者杯といふ時の覺者と同樣に解せらるゝ恐がある、しかしこれは本來佛教特殊の意義を有するのであるから、此誤解を避くる爲め原語をそのまゝの音を寫して置くのである。それから第五を善を生ずるためといふのである。例へば「般若」といふ言葉は佛教で屢々用ひます。「般若」は智慧である。智慧と譯せばよいが、智慧と譯せば俗間の智慧と混同し易い、而して佛教の眞正な智慧をも之を輕する嫌がないでもない、で原語のまゝ遣して解釋しておく方がよい。斯ういふ風で翻譯の出來るものでも、翻譯しないといふものがある。斯くして外國語が佛教の輸入と共に澤山はいつて來たのであります。佛教

經典の中には、印度語の言葉の音で寫されてゐるものが、どれだけあるか殆んど判らない位澤山あるのであります。而して佛教思想が民間に流布するに隨ひ此等外國語が俗間にも亦屢々用ゐらるゝことゝもなつた。

そこでこれから外國の言葉を支那ではどういふ風に寫してゐたかといふことを少し申し上げたいと思ふのであります。外國語をそのまゝ傳ふるにはそれに似寄つた音字を當てるといふのが極めて自然であります、所が支那には音韻の文字はありません、象形の文字であります、だからそこに色々の不便が生ずる、今のローマ字のやふに外國語の音を正確に現はすことがむづかしい。又假令ひそれが出来るとしても一音毎に一字を當てなければならぬから非常に長くなる嫌がある。短い言葉は一音で現すことも出来ませんが、少し長い綴の言葉になりますと、一語音を寫すに、支那の五字も六字も、甚しきに至つては九字十字も使はねばならないこともある。支那の文章は總て簡潔を尊ぶのでありますが、長たらしい文句を使つて居ては洵に不便であります。又短い言葉で一字を以て寫し出さるゝものにあつてはそれは一体音を現はした字であるのか、義を現はしてゐるのか甚だ曖昧なことが出来ます。支那の文字を以て外國語を音譯するには斯く諸種の不便がある、けれども新譯家即ち唐の時代玄奘以後の翻譯家は不便であるに拘らず成るべく正しい音を支那に傳へやうと考へたのであります。で長くなつても字音を出來るだけ精密に現はすこととした。

舊譯家即ち玄奘以前の翻譯家と此點に於て大に相違する、舊譯家は餘り長たらしく解らない意味の文字ばかりが續くことを好まず、又其曖昧を避くる爲め餘程輕便主義を採つて居る。先づ第一には新しい字を作るのである。支那にこれまでにない字を作つて之を現すといふことをやつた、然らば其字を作るのはどういふ風にしたかといふと、之にも色々ある。が一つの法は先づ音を寫す、例へば二字を以て音を寫すとすれば、此二字を一字に合してしまふのである、これは隨分無理な作方のやうですが、實際には頗る便利な方法で近頃日本でもキログラムといふ字を瓦扁に千の字を書き千瓦の二字を一字とし庇とし使つてゐる支那に於てもこれと同様であつた。しかし最も多いのは音の近い字を借り原語の音を寫して、それに支那の六書の内の諧聲とか形聲といふやうな字の構造法に依つてそのものゝ性質を現す處の扁をつけるのである。斯くして一つの新しい支那字が造らるゝのである。これが最も普通に行はれた方法であつたやうである、それから第三にはこれは新字を作るのではないが、原語の音を寫した字が段々時代の經過に伴ひ其形を變化して來る。云はば俗字が出來るのである。而もこの俗字が後世では寧ろそのものを現す正しい文字のやうになつてしまふのである。この俗字は新たに字を作つたのではないが、新字であることは前と同様であり、後世の辭書には何れも之を擧げて居る。更に新譯家の採る處は主として音寫であるから。文字の形は支那舊來のと少しも變化ないが、其意義に於ては、從來それによつて顯はさるゝ所とは全然異なつたものとなり、新意義が新たに加ふことと

なる、さういふやうにいろ／＼新らしい字形又は字義が出来て来る場合があるのであります。今次にこれらの二三の例をお話致してみやうと思ふのであります。

先づ第一に二字を一字に合したものの、これは支那にも餘り澤山はありません。その最も著しいのは「菩薩」の「薩」の字であります、今の字では「薩」と書いて居りますが、これは本来支那には佛教渡來以前なかつた文字であり、新たに出来たのであります。だから音だけあつて義のない字である、これをどうして「サツ」と讀んだか、「サツ」といふ音は字の形からは出て来ないのである、が本願寺の大谷光瑞さんの西域から持歸られた漢末か三國時代前後の古寫經の斷片と思はるゝものを見ますと、この「薩」といふ字が「薛土」となつて居る、薛は今日我邦では「セツ」と讀んで居りますが、昔は「サツ」といふ音に近かつたのぢやないかと思はれます。でこれは「サツド」となるのであります。梵語 (Sattva) は俗語の *sattva* であり普通の發音はサットである。薛土は洵に能くその音を現して居るのである、所がこれが三國時代以後になつて來ますと、この字が一つに合して「薩」となつて來る。此形は六朝から唐宋に至る迄一般に用ゐられて居るのである、所が艸冠や阜扁コゼトは可なりとして其右側の文字は頗る奇怪な形をなすにより。宋末乃至元以後は「薩」になつて來た。明までこの「薩」字を使つてゐる、而して清朝になつては更らに一變し「薩」となつたのである、これは全然誤字といへば誤字であるが、今は一般に此字を用ゐてゐるのである、而して「薩」をサツと讀むのは「薛土」から來たものであるからである、薩は本

來「サツタ」の音寫字であつたが、これが一字となり「サツ」と讀まれてからは「サツタ」といふ時には「薩埵」と書くやうにもなつた。次にこれは二字を合したといふよりも略字といふ方が適當であらうと思ふが唐代の寫經には屢々「塏」と書いて之をボダイ(菩提)と讀んで居ります、これも二字を合して稍單簡化したのである。斯の如きも一般に用ゐられなば長い間には又一つの新字となる譯であります。唐代既にそうであるが日本でも「ササ」と書いて「菩薩」と讀んでゐる。これは略字の甚しいもので、文字といふ程でもないかも知れぬが、矢張同じ原理から來てゐるのである、それで不思議なのは「𑖦」である、これはネハン——涅槃と讀むのである。これは單に符牒といふ外ない。菩薩の場合なら二字共にサ^ンが附いてゐるから此一つのサを合せ、他の部分を略したものと解すべきであるが、「涅槃」の場合は何處にも「𑖦」の形はない。それを便宜二つ合せ「𑖦」となし涅槃と讀んで居るに至つては單に符牒といはざるを得ぬ。がこれは恐らく「𑖦」を以てボサツとなした所から「𑖦」を便宜ネハンとしたものと思はれるのであります、でこれらも二字を一字に合した例となり得るものかと思はれる。それから第二の所謂諧聲で音字にそのものの性質を現はす扁を附したのは殆んど無數に存するのであつて、皆さんもよく御存知の事で特に御話する必要はない位である、「佛」とか「魔」とか「塔」とかいふ字は皆それであります。これらは皆新たに作つた字である、「佛」に於てはブツといふ音を現はせばよい、而してこれは人間であるから人扁を附けたのである。ブツの音を現はすだけならば弗だけでも宜いのであるがこ

れだけでは曖昧である、音が義が判らない、それで特殊の文字として「佛」を作つたのである。支那で始めて佛教が傳はつた時にはこれも二字を以て顯して居た。今三國志の魏書の註に引用せられて居る魏略の西戎傳に「復立」といふのが佛字に當てられた最も古い字形であらう。今の本には立とあるが、「立」は「土」の誤寫であります。「土」は支那古代には「土」と書く所から「立」に誤寫されたのであります。これは前漢の末支那の景盧といふ人が西域に行き、大月支國に居る中に伊存といふ人から佛教を口授されたのである。其時に此「復土」の音字を用ゐたものらしい。又同じ處に浮屠經の字もある、「浮屠」もブツドの音を寫したものであるが、恐らく「復土」の後に出來たものではなからうか。漢代支那に佛經の翻譯された最初のものといはるゝ四十二章經の今本には常に「浮屠」といふ音が書かれてある、又西曆百年代の中葉、漢の桓帝靈帝の頃に襄楷といふ人が居たが、其上表の文にも「浮屠」といふ字が書いてある。浮屠は本來斯くブツドの音を寫したものであるが。六朝時代から浮屠と同音の浮圖は塔を意義することとなつた。兎に角復土が浮屠となり、更にそれが一字に約められ「佛」といふ新字が造られたのであります。「魔」といふ字も音以外何等の意義はない。「マ」といふ音だけを現はしたもので梵語のマラーの下を略したのであります。それで元は「磨」と書いて居つたのである、がこれでは意味が判らない、それで梁の武帝がこの「磨」の下部の「石」の代りに「鬼」といふ字を書いたといふのであります。鬼は惡魔の性質を現したものである。又「塔」も「荅」だけでよいのであるが、しかしながら塔の性質を

現すために土扁を附し塔といふ新らしい字を造つたのである。印度の「スツバー」は俗語では「ツーパー」であり、それから今英語では「トープ」といつてゐる、この「塔」は支那の古墳の墳といふ字と同じて土石を積累したものである。墓には土を盛り上げ饅頭形のものとなす、これが「累土」である、「塔」の本義である。それで「塔」といふ字には土扁をつけたのである。現存する支那の塔は煉瓦で建てたものであるから、これには瓦扁でも附けるべきものであり。日本の塔は木造であるから木扁を附けるべきでありまじやう。近頃は又鐵筋コンクリートのものも出来たから金扁の塔も成り立ち得る譯であります。これらは最も判り易いものであり、皆さんも既に御存知の事と思ひます。何れも支那の形聲即ち字の一方は音を現はし他の方は其物の性質を現はすといふ元理から成立つた文字であります。

第三種の俗字に至つてはなかく判りにくいのであります、今普通に使はれてゐる文字に「刹」といふ字がありますが、どうしてこれが「サツ」と讀めるか頗る不思議なのであります、が本來これは「擦」の字を用ゐて居た。今でも「擦柱」「杯」といつて塔の上の柱を表はして居る。此にも木扁のも手扁のもある。支那文字の意味は違ふが音だけ現はすにはどちらでも差支ない。何れも「サツ」の音を現はすだけである。梵語は *stupa* クセトラである、此音は支那字で寫し出すのがむづかしいから、之に近い「刹」といふ字も用ゐた。これは「シ」とか「シツ」といふ音の字である、義は「割る」とか「傷つける」といふのである、が支那字本來の義は此に何等の關係のないのである。音だけを現すために他に適當な文字が

ないから「刹」といふ字を宛てたものゝやうである。この「刹」は元からある支那の字であつたが、それが段々變化して終には今の「刹」となつた。で字書にも略とも訛ともいつてある。古寫經を見ますと「刹」といふ字は「刹」と書いてある。それから更に「刹」ともなつて居る。誤字といへば誤字であります。而して最後に最も簡單になつたのか「刹」であります。今は總て「刹」を用ひてゐるが、これは元來支那に存せざる新字であります。又其義からいつても「刹」は元「土田」と解釋せられ、場所とか國土とかの意味であります、で佛教者は刹土ともいひ、刹は神聖な場所、神聖な區域といふ意味で使つたものだと思はれる。けれども普通はそんな意味に使つて居らない。「刹」といふのは塔の眞中に立つてゐる柱で、之を「刹柱」といつて居り、佛塔中心の柱と解釋して居る。「土田」といふやうな、義から塔中心の柱を意味するに至つたかといふに「塔」には舍利―佛舍利といふものを收めるのが常則である、本來は舍利を收めた印として塔を作つたのです。舍利は佛身の一部で最も神聖なものであるから、其神聖な場所の印として塔上に柱、實は蓋を樹てたのである。斯かる意味からして塔土の蓋即ち柱(蓋の支柱)をも刹と稱するに至つたのであります。又次に塔上の柱を「刹」といつたことから更に意味が廣くなつて、佛塔そのものを刹と稱した。古詩に「刹々相望」といふ句があり、註には刹々とは佛塔なりとある。即ち「塔」があちらにもこちらにも澤山相並び立つことをいつたのであります。又「五山十刹」といふ時の刹の如きは單に塔だけではなく、寧ろ寺院そのもののことをいふのであります。だから「塔」の意義

も後世次第に廣くなり吾々の思想の結び附きによつて意味が變つて來た譯であります。

斯くして文字の形に於ても、又其義に於ても幾多の變還を來しました。又「鉢」の字は普通「はち」とか「はつ」とか讀んでゐる。こんな不思議な音は何處から起つたのであらうか、今の字の形に於てはこれは「はん」とでも讀まなければならないものである。而して斯かる字も亦支那には元無かつたのである。これがどうして「はち」と讀まるゝのか、又どういふ字から變つて來たかといふと「はつ」といふのは梵語では「Pata」「パトラ」俗語では「Patta」「パッタ」である。で始め支那で之を音譯した時には「跋陁羅」と書いて居つた。これは「Pata」の音譯である。所か支那では普通一語の首又尾音を略して用ゐる。さういふ事は人間の名ですら屢々見らるゝのである。假へば般若留志といふ人が居る。さうすると其初の「ハンニヤ」を略して單に留志といふ。菩提達摩といふ人が居れば其初のダイを略して單に達磨といふが如きである。この「跋陁羅」に於けるも亦之と同様であつて、跋陁羅では長いから其終を略して單に「跋」としたのである。これが抑々今の「ハッ」の音の生じ來つた所以である。が「跋」の字は足扁であるからこれは事物の性質を顯すに不適當であるのでこれを金扁にし「鉢」とした、これは食事をする時の僧の食器である。それから樂器にも使ひます、食器の「ハッ」は燃物であるので皿を下に書いて蓋といふ字を以て現すことにもなつた、而して最後に鉢が鉢と變つて來たのである。鉢の右側は本に似て居る所から誤つたものである。所がこの「本」は「本」の俗字であるので之を正しい字に書き替へたも

のが今俗間一般に用ゐて居る鉢の字である。要するにこれは誤の上に誤を重ねたものではあるが、今日では字書にも之を挙げ正しい字となつて居る。斯ふ云ふやうな俗字訛字誤字が新たな字と認めらるゝやうになつた例は外にも澤山あります。

又音だけ寫したものでないやうでありますが、實際に於て混亂を來し易いことが屢々起り、文字だけを見てはそれが、支那語か外國語か判らないやうな場合がある、支那の言葉に「師」といふ字がある、「師」とは二千五百人をいふのである。師團の師である。「一旅」といふのは五百人であり、「五旅」が一師となる。これが師本來の意義らしい、それから「師」といふ字は「衆」といふ意味にも轉用された。京師といふ時の師は即ち大衆の稱と解せられる。又更に大衆が團體生活をするには必らず之を統率するものを要する所から長を師ともいつた。それから道を以て人を教へるものも「師」といふことになつた、これだけの意義は説文にも既に載つて居り、支那字の本義から次第に轉じ生じたものであります。所が「師」は此等以外の新たな意義が加はつて來た。それは「師子」といふ時の師である。これは即ち梵語の *Simha* の俗語 *Sina* の音譯である、師は動物であるから後世では獸扁を附し獅の字が成立した。而して師は既に音を寫したのであるから此の一字で十分なのである、子の字を附したのはこれは單に支那の助辭に過ぎない。此師の意義は從來ない新たなものであり、又獅も新たな字である。古來支那では六書といつて又六種の元理によつて字の構成から發音及び意義を説明することに

なつて居りますが、昔の支那の文字はこれで説明が出来るとしても、今日の支那文字は到底六書のみでは解釋の出来ない新しい字が澤山出来て来る、時には字の構成を解釋し得ないものもあれば又時には發音の由來を説明し得ないものもあり、又別の系統から新たな意味の加はつたものも少くないのであります、師に關聯した語としては支那には「狻猊」といふ文字がある、これは獅子のことだといふ、穆天子傳中に野馬とあり、又走る事五百里ともある。が註には「狻猊」は獅子なりとあり。而して野馬とは馬に似て小さいものとしてある。野馬といふのが果して獅子と同一なるものか否は明らかならないが、何れにしてもこれは想像を以て書かれたものでなからうかと思ふ。此には穆天子が色々の動物を連れて西の方に行つたといふのであるが、其中に「狻猊」といふものが出てゐるのである、若しこれが果して師子であるとすれば獅子は元來支那に居ないのであるから「狻猊」といふ語も矢張支那の言葉でないに相違ない。「狻猊」といふ語は二字で、一つの意味を現してゐるが、「狻」といふのは獅子を現はすものと字書にも出て居るが「猊」だけでは何の意義もない狻と合して始めて一義をなすものである。狩谷掖齋の和名類聚抄には師子の條下に釋の潮音——これは眞宗の坊さんであつて徳川時代に在世した人であるが——この人の説を引いて次のやうなことがいふてある、獅子とは梵語には「𑖀𑖦𑖫𑖞」と言ふ、梵語雜名に見ゆ。「𑖀𑖦𑖫𑖞」は即ち「𑖀𑖦𑖫𑖞」の一轉、師も亦「𑖀𑖦𑖫𑖞」の下略なり、しからば即ち「狻猊」も「師」も梵語の僞略なりと、これは梵語の音寫であるといふのである。「狻」とか「𑖀𑖦𑖫𑖞」とかいふ字音は

梵語「シンハ」の「シン」俗語「シーハ」の「シー」に幾らか近いが。「猊」といふ字を以て「ハ」の音を現はす事は殆んど其例がない。「ハ」は普通「伽」訶を以て現はしてゐる。で果して「猊」が「ハ」の音を現はしたものの可否に就いては大なる疑があるのである。私は寧ろ次のやうに考へたら何うかと思ふ。「猊」の獸扁は、獅子のそれと同じく其物の性質を顯はす爲め後世附けられたものである。本來は音だけを現はしたもので「猊」であつたのである。而して「兒」は師子の子と同じく助字である。例へば「花兒」といふときの「兒」と同様である、實は「猊」だけで其音を寫したものであると。斯ういふやうに考へたらどうかと思ふ。而して後世牙扁を附する時、猊兒を以て師子を現はしたので、「兒」にまで牙扁を附するに至つたのであらう。斯く考ふることによつて「猊」の語は初めてはつきりと理解が出来るやうに思はれるのであります。若し果してそうであるならば何時頃から知らんが高僧に對し何々猊下といふやうな尊稱を用ゐることゝなつて居るが、しかし猊下の猊だけでは何の意味もない事であつて頗る奇怪な語であるといはなければならぬことになる。斯ういふやうに本來支那の言葉か外國の言葉か判らないやうになつてゐる語の例は随分他にもあるのである。又斯ういふ事から考へて來ると穆天子傳といふのはいつ頃出來たか少くとも何時頃今の形となつて來たかどの大体の推察も出来る譯である。即ち獅子といふ言葉が支那に傳はつてから出來たものでなければならんと思ふ。それからもう一つ之と相似たものには「貝」といふ字がある。これは支那の古い形象文字である。説文には海介屬也とあり、貝殼

の貝の恰好から來たものである。又昔は貝を貨幣のかわりに使つて居つたから錢の意味も出來てきた。これらは其物の性質から當然生じ來つたもので、極めて明瞭である。所が此の他に貝といふ字に織物を現はす意味がある。これは「貝」といふ字そのものからは出て來ないものである。書經の禹貢には淮海といふ所の物産として「織貝」といふものが擧げてあります。その鄭註を見ますと「織貝」の「貝」とは錦の名とある。又吳氏いふ、其糸を五色に染めて、これを織つて文を成すものを「織貝」といふもあります。とにかく織物の名前であります。さういふ點から考へて、この「貝」といふ字は矢張外國語であり外國の音を寫したものでなからうかと思はれる。

佛教の經典には「古貝」或は「覓貝」といふ字が屢々出て居る、これは織物であり梵語「Karpasa」の俗語「Kappasa」といふ字の音を寫して「古貝」となしたのである。この「古貝」の上を略して「貝」といふ。「古貝」といふのは一切經の音義を見ますと、木の花の名であるといひ、又以て布を造るべしともある。更らに「高昌」には「蠶」と名附く。カシミヤから南には大なるもの樹をなし、北の方は形が小さく、その狀は葵のやうなものである、花から實が出來、實の殻が割れて出づる、花は柳絮の如くつむいで布を成し之を用て衣を爲るといふ。要するに「カツバサー」といふのは棉の木であります、而してヒマラヤ山の北と南とで木の大きさも違ふらしい。がとにかく花が咲いて實が成り、其殻が割れると綿がふき出て來る、それを紡いで糸にして着物を織るのであります。昔は木綿が珍らしかつたと見へて、絹

と同様に尊ばれ王侯貴人でなければ綿服は着ることが出来なかつたらしい。で古代は支那へも西域南海の諸國からして貢物として献上せられてゐる。この「氈」といふ字はこれも音を寫したに過ぎないので、古くは單に疊と書いたが、後世綿の織緯から成れるにより毛を附し氈となしたのである。而して此疊の名は高昌國の名稱であつたらしい、が印度で「カッバサ」といつたのである。尙ほ一切經音義釋の中には五色の氈ともあるから、色織物もあつたらしい。木綿糸を染めて織れば色々の模様の織物が出来る理である。單に無地であれば白木綿である。若然りとすれば「貝」は禹貢には淮海の土産物として擧げてあるが、果して土産物であつたが、或は南海地方から輸入されて來たものではなかつたかと思はれる。さうして鄭註は錦の名なりといふのも頗る怪しむべきである。又支那の學者は時として貝を解して貝の模様の織物だともいふが、是れも恐らく貝字に符合した解釋ではなからうか、但織物としての貝字は支那にあつても頗る古く用ゐられて居たやうであるから必らずしもこれは佛教傳來以後始めて現はれたものではないのであります。

もう一つ簡單に申し上げます、私は從來「龜^{ガン}」といふ字に就き色々疑ひをもつて居たのであります。この「龜」といふ字は今龍の上に「合」を書いてゐるが、説文ではこれは間違ひで「今」といふのが正しいのであるといふ。而して音は「𪚩」^{ギン}「堪」である。恐らくこれは「含」の字の下の方が略されたのでなからうかと思ふ。一体今の説文では从龍今聲とありますが、一切經音義の中にこの「龜」といふ字が屢

々出てゐる。而してそれによると从龍从含、省聲也とある。して見ると今本の説文に「今」に从ふとある。「今」は唐代の古本には「含」の字であつたのであらうかと思ふ。次に龕は説文では龍の形なりとあります。しかし其外にも色々な意味がある、或は「受」なりとか、或は「盛」なりとか或は「取」なりとか或は「勝」なりとかいふやうな意味が出てゐる。龍の形からは斯んな意味は出て來ない筈であります。支那の言葉は音通によつて同音の字から義の轉するものが非常に多いのであります。龕の字の如きも亦それであつて其字の本義とは全然無關係なものである。此受とか盛とかの義は其同音字鈴から轉じたのであり、楊子方言にも鈴龕受之、齊楚曰銘、楊越曰龕、受、盛也、猶秦晋言容盛也ともある。又取るや勝の義は同音字戡から轉じたものらしい。戡は廣雅には「克也、勝也、殺也、取也」とある。斯くして支那文字には其本義から全然豫想せられない、時としては反對の義すらも附せらるゝことが少なくないのである。

唐時代の寫經を見ますと色々な宛字が書いてある。吾々字の形を見て讀んでは意義が全く判らない支那人は音で讀むのであるから其意味が能く通するのである。例へば唐の寫經の中に「名」といふ字の代りに「明」といふ字が書いてある。又一方「明」の代りに「迷」の字も書いてある。明と迷とは其義全く相反するのである。だから文字の通りでは意義は更に通じない。又「問」を「聞」「文」「門」等と互に融通して使つてゐる、これ等は音通だけで必らずしも義まで轉じたのではないが、斯かる文字が互に融

通し用ゐられ、歲月を経過すれば、竟には其義までも轉じ來ることは疑ないのであつて、六書ではこれを假借といふてゐるのであります。だから支那に於ては音通といふ事が字の音義を解釋する上に非常に大切な關係を有するのであります、支那では一の言葉で反對の意味をもつてゐるものが少なからずある。「借」と「貸」と「授」と「受」「乞」と「與へる」と「亂」と「治」等何れも皆互用されて居る。斯く字で全く反對の意味を有するといふのは甚だ不思議なことで實際上こんな文字は役に立たないのであります、一萬圓借りたことが一萬圓貸した事になつては實際上大變な間違が生ずる。文字は各社會に於ける必要によつて生じたものである、それが同じ文字で反對の意義を顯はすとすれば到底其必要を充たすことが出來ない筈であるが、これには諸種の原因があるかも知れぬが、主として同音字から次第に意義が轉じ來たのでなからうかと考へる。兎も角假借即ち音通といふことが、支那文字の意義の上に非常に重大な影響をもつて居るものである、そこで「龕」といふ字も亦之と同様であつて音通から諸種の新たな意義が増して來たのであるが、更らに外國語の音を寫したることによつて又新たな意義が加はつて來た、例えば「佛龕」といふ時の「龕」。これは山の腹に凹處を作り其處に佛像を安置したものといふ。印度でも、支那でも又我邦にも往々斯かるものが存在する。この時の「龕」といふのは決して龍の形でもなければ「勝つ」「盛り」「取る」「受る」といふやうな意味ではない、此等と全く關係のないものである。印度で「Kandara」といふのは窟穴であり、「龕」は此音を寫しただけである。斯う云ふやうに今佛教者

が使つて居る「龕」といふ字義は支那には從來なかつた新たなものであります、で「龕」を解釋して或は「鑿山壁爲坎也」とか「巖中淺小石窟也」といふのは外國語の「龕」の本義である。日本の佛間のやうな所、或は日本建築の床の間といふ如きは「龕」の變態である。これは皆佛像を安置してある窪處である。床の間は日本建築に特有のものであるが、これも寺院の建築から變化して來たもので、昔は此處に佛器を飾つて居たことによつても知ることが出来る、それから更らに後世では浮圓塔とか、塔下室とかいふ解釋も生じて來た。龕は佛像を安置した窟室であるから、塔の如き佛像を置く處をも均しく龕といふやうになつた。特に支那の塔は多く煉瓦造りであり、四面窓の處に窪處を造り、佛像を置いたものがある。此等は明かに龕である、塔下の室とは斯かるものをいつたのであらう。遂には柩まで龕と稱するに至つた。塔は本來舍利を置く處であるから、遺体を藏する柩にまで轉用したのである。斯くして龕にも次第に新らしい意味が加はり來たのであります。こう云ふ例は外にもいくらかありますが餘り長くなりますから今日はこれで終ることに致します。要するに支那の音譯といふものは隨分厄介なものでありまして、時としては色々な點から不明混亂が生じ、其解釋に困難を來す場合の少なからず存することを一言申し上げ御參考に供した次第であります。(昭和八年十月七日懷德堂記念講演速記)